旅立ち２

東美知子は、福吉町のスーパー「小室ストアー」のレジ・カウンターに、買い物客が並べる商品を機械に登録しながら時々、頭を横に振った。

美知子は、地元・鳥取産の生鮮食料品や関西の乾物などは興味をもって一瞥することはあるのだが、それは案外少なく、どこにでもある見慣れた日用品や加工品、菓子類が実に数多くあり、それが目の前に置かれることがつらかった。東京での思い出を吹っ切るつもりで、遠く山陰の町まで来た彼女だったが、過去を捨てることがいかに難しいかを、毎日のレジの仕事が教えてくれた。石鹸やシャンプー、化粧品、洗剤、クラッカー、ビスケット、ドライフルーツ、缶詰、調味料、冷凍食品……そういう品々の中に、杉崎徹の好物や愛用品が混ざっていると、美知子は中空に目を泳がせて、肩にかかった豊かな髪を小刻みに揺するのだった。

美知子が倉吉市の小鴨川沿いの安アパートに引っ越してきて、もう二ヶ月がたとうとしていた。一ヶ月前に、徹

に長文の手紙を書いたことで自分の気持を整理したつもりだったが、足かけ三年になる恋を、彼女はそう簡単に葬り去ることができなかった。徹からは二週間前に簡単な手紙が来ただけだった。美知子があれだけの思いを込めて書いた〝別れ〟の手紙に対して、「とにかく貴女の遺伝子カードを送ってほしい」というだけの内容だったのが、美知子には寂しかった。でも彼女は確信していた。徹は、二人のカードの情報を解析して、自分が手紙に書いたことが事実と相違ないと知ったならば、必ず手紙をくれる、と。そんな信念が自分の中にあると気づくと、美知子は、恋人を兄と思おうとする自分の試みは、本当は不可能ではないかという気がしてくるのだった。

この疑念は、しかし美知子にとって甘美で、魅惑的だった。不可能である方がどんなに嬉しいだろう。精一杯努力しても不可能なのであれば、いっそこの熱い思いに身を任せてしまおう——こんな考えが浮かんだり消えたりしながら、美知子の日常を蝕んでいた。

そんな時に、ついに美知子は徹から手紙を受け取った。

速達便だった。

――愛する美知子へ

倉吉から送ってくれた貴女の手紙を読みました。

読んでからしばらく、何にも手がつきませんでした。何回も読み返しては、美知子の本心がどこにあるのかを考えました。何かの事情で僕と別れるために、奇想天外な口実を作ったのだと最初は考えました。それほど、貴女の手紙の内容は荒唐無稽に感じられました。

中でも、遺伝子カードから判明した僕の〝出生の事実〟というのをいちばん怪しみました。自分の遺伝上の父親が戸籍上の父親とは違うなんて、簡単には信じられません。さらに信じられなかったのは、ＡＩＤで生まれる人の数がいくら多いといっても、たまたま知り合った美知子と僕が二人ともＡＩＤによる子供で、しかもその精子提供者が同一人物であるということです。偶然にしては余りにもできすぎている。それが正直な実感でした。

二日ほどたってやっと冷静さがもどってきたので、僕は

事態をできるだけ論理的に考えようと思いました。すべての可能性をリストアップし、それを一つずつ検証してつぶしていけば、きっと正しい結論に達するだろうと思いました。だから、その可能性の一つに、最初に書いた「口実」も含めていました。つまり、この遺伝子関係の話はすべてデタラメで、本当は美知子が僕と別れたいのだ、という可能性も考えました。だから、この間はあんな冷たい感じの返事を送ってしまいました。

とにかく美知子の遺伝子カードを手に入れて、僕自身の手で事実を確認したいと思ったのです。貴女はすぐにカードを送ってくれました。そのことだけで、僕は美知子の言ったことが本当だと感じました。でも、確認のためにセンターへ行きました。結果は、やはり貴女の言ったとおりでした。疑った僕をどうか許して下さい。とても容認しがたいことでしたが、次へ進まなければならないと思いました。

この事実があれば、親はきっと本当のことをもっと詳しく話すと思い、実家に帰って父に疑問をぶつけることにしました。結論から先に言うと、父は無精子症だったのです。

僕は、そのことを話してくれた父の、苦渋に満ちた顔をよく覚えています。男にとって、子をつくれない体であることは恥ずべきことであるだけでなく、父親を同性の手本だと思っている息子にそれを告白するのは、ずいぶんつらかったろうと思います。それから、父はこう言いました。

「ぼくと母さんはよく話し合った。子ができず、養子などして双方の遺伝子が全く伝わらないよりも、どちらかの遺伝子が子に伝わる方がずっといい。それに、遺伝子が伝わるから子となるのではなく、愛情をかけて親子関係が成立することで子となるはずだ。そういう結論に達したんだ」

それならなぜ、もっと早く話してくれなかったのか、と僕は聞きました。困惑した顔で父は答えました。

「徹が小さい頃は、話しても分からないと思ったし、分かるようになったらなったで、ぼくらから離れていくことが恐かった」

父は、顔を紅潮させて目に涙を浮かべていました。

僕はその時、美知子とのことを父に話して、僕がＡＩＤの事実を知らなかったことでどんな悲しみを味わわねば

ならないかを言ってやろうと思いました。しかし父が、これまで見たことのないほど打ちのめされた様子なのを見て、思い止まりました。考えてみたら、ＡＩＤの事実を僕が知っていたとしても、美知子と出会い、恋愛関係になったかもしれないのです。

僕と父との問題は、これでいいのだと思います。息子と男親との間には、どこか他人のような空気があっても必ずしも異常ではないと思います。母との会話は、それほど緊張したものではありませんでした。僕が「父さんから、僕の生まれのことを聞いた」と言うと、母は一瞬顔色を変え、それから「そう。でも貴方、お父さんがどんなによくしてくれたか知ってるでしょう?」と心配そうに言いました。

「うん、わかってる」と僕は答えました。

でも、僕がその時考えていたのは、自分が父と似ていないということでした。今までにもそういう印象をもったことはあるのですが、父に似ないことは男として独立している証拠だなどと考えて、あまり気にしていなかったのに、ＡＩＤの事実を知ってからは、遺伝上の父親のことを想像

している自分に気づくことがあります。

でも、僕はどこかの小説にあるように、遺伝上の父親を捜しに旅に出ようなどとは考えていません。そんなことより、僕にはもっと大切なことがあります。それは美知子、貴女のことです。

異母兄妹は、なぜ結ばれてはいけないのでしょうか？もちろん僕も科学を志す者として、生物界に「性」が存在するのは、子孫の遺伝子を多様化させて、予期せぬ出来事に対する種族の抵抗力を維持するためであることは知っています。だから、近親者間の性は、生物学的にタブーとなっていて、そこからは子が生まれないような仕組みになっていたり、生まれても奇形や遺伝病が生じやすくなっているに違いありません。しかし、それは「人間」が関与する前の自然界の掟です。

人類の歴史は、技術や科学による自然への関与の歴史です。科学技術は、自然界の〝掟〟を発見し、人間が自らの生存のために利用することで、自然界のつくり上げた数々の障害を次々と克服してきました。人間はこれによって、

自然が鳥や昆虫にしか与えていなかった「飛翔」の力を獲得し、鯨や魚貝類が独占していた水中での活動能力を獲得し、モグラや虫や菌類しか棲めなかった地中にも、街を造り上げてきました。

この同じ科学技術の力で、生殖能力の弱い（つまり、自然界が存続を嫌っている）栽培種の植物や、遺伝子組み換え作物が、地上では大いに繁栄しています。また、自然が不可能としてきた哺乳動物のクローニングは、畜産分野では今や常識化しています。この考え方を延長すれば、自然界が禁じてきた近親者間の結婚や、その子孫の繁栄も、人間がそれを希望すれば、いずれ実現するのではないでしょうか？

いや、それは技術的にはもう実現できます。近親者間の子に遺伝的な障害がよく現れるという問題は、着床前の遺伝子診断と遺伝子治療によって防ぐことができます。美知子も知っているとおり、今は体外受精によって受精卵を得、それを母胎に着床させる前に遺伝子検査をすることで、遺伝的欠陥のない子だけを妊娠する方法がほぼ確立してい

ます。もちろん、血のつながっていない男女間の受精卵よりも、近親者間の受精卵には欠陥が多いかもしれません。が、それも人間の技術によって乗り越えられる時代になっているのです。

もし美知子が、そんなに無理をして異母兄妹間に子をつくる必要はないと考えるなら、僕らが生まれた方法で、僕らの子をつくることができます。そうです、ＡＩＤを行えばいいのです。ＡＩＤで生まれた子が、自分たちもＡＩＤで子をつくることに何のためらいが必要でしょうか？美知子は、ＡＩＤで生まれたことを後悔していますか？僕は後悔などしていません。僕の子には、僕の遺伝子を引き継いでほしいとは思いますが、それがその子にとって危険だというのなら、誰かの遺伝子と美知子の遺伝子によって僕の子が生まれることを、拒否するつもりはありません。

重要なのは、美知子と僕の愛が成就することです。それがあって初めて僕らの子が誕生するのであり、僕らの子が遺伝的に正常であるために僕らが結ばれたり、結ばれなかったりするのではないはずです。子のために親が結婚する

のではなく、結婚した結果、子が生まれるのです。主客転倒は禁物です。

また、子の問題でリスクを冒したくないのならば、子をもたない結婚生活を選んでもいいと思います。今の時代、色々な理由からあえて子をもたずに幸福な生活を送っている夫婦はたくさんいます。また、昔からある「養子」の制度を利用することもできます。とにかく、僕たちは「第一のことを第一にする」べきではないでしょうか。その「第一のこと」とは、もちろん二人が愛し合っているという事実です。

美知子、貴女は僕らの愛を「兄妹の愛」に変えればいいと言いますが、それは本心を偽ることにならないでしょうか？　自分にウソをついて生きることほど、愚かなことはないと思いませんか？　僕には、そんなことはできません。僕は、美知子を一人の女性として愛しているのであり、妹として愛しているのではありません。妹というものは、そばにいれば楽しいし、それなりに意味のある人間関係を結ぶことができますが、いずれ離れ離れに生きていく関係で

す。そういう関係になりたいということは「いずれ別れたい」と言っているのと同じです。しかも、これからは互いに会わずに、手紙のやりとりだけで兄妹関係を続けていくなどと言うのは、「恋人としてはすぐ別れたい」と言っているのと同じです。

僕は、美知子の愛がその程度のものだったとは決して思いません。遺伝的に僕と異母兄妹であるというだけの理由で、貴女が僕との愛を否定できるはずがないと思います。遺伝子の配列が僕とよく似ているという物質的な理由だけで、これまで二人で築き上げてきた精神的資産と愛とを、貴女は放棄できるはずがない。第一、貴女自身が、僕に対して「まだまだ強い牽引力を感じます」と書いているのです。その正直な心を否定しないで下さい。

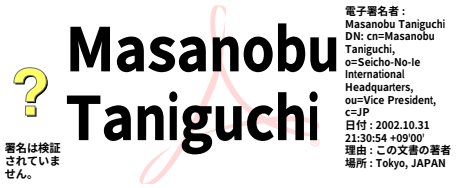
美知子、一度会っただけの六十代のお婆さんの言うことなどに従わないで、どうか自分の本心に従って下さい。自然の力の下では人間は無力だと考えていたのは、二十世紀までの話です。二十一世紀は、人間が自然を支配するのです。僕らの愛が、自然界の禁忌を乗り越えることに、躊躇

する必要はありません。

僕は今度の週末に倉吉市に行きます。貴女が私書箱の住所しか教えてくれないのは、僕が来ることを警戒してのことだと思いますが、僕たちは会って話をしなければなりません。どうか会って下さい。僕たちの両親が、僕たちの知らないところで行った生殖医療によって、僕たちの愛が否定され、僕たちの運命が支配されることなど、あってはならないことです。それでは、封建時代と同じです。僕たちは何も悪いことなどしていない。だから、何かに罰されたみたいに、愛が引き裂かれることなどあってはならないのです。

土曜日の晩には、倉吉シティホテルにいます。連絡を待ってます。

杉崎　徹

東美知子は、自分のアパートの一室で目を赤くして徹の手紙から顔を上げた。徹は二日後に来る。会えば、決意が崩壊しそうだった。「自然を越えよう」という徹の訴えは、

彼女には「自分を越えろ」という要求のように聞こえた。
美知子は、結婚とは自分を越えることだと思った。